

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



自宅の延長にあるような寛いだ雰囲気のできサービスで思い思いの時間を（フキデチョウ文庫）

特集 シニアが輝く

- 縁あって出会った仲間とともに ③
東地区高齢者クラブ（宮城県南三陸町）
- みんなで社会参加！ちょっとした助け合いも ⑤
新道長寿会（宮城県登米市）
- 希望を持って、元気で長生き！
地区に根ざした長寿会の活動 ⑦
七日原長寿会（宮城県蔵王町）

☆専門家に聞く地域づくりのヒント
（名古屋学院大学 現代社会学部 准教授 村上 寿来さん）

東北の元気 ⑨

野いちごの会（宮城県南三陸町）

場の力 ⑩

いっぷく処（宮城県仙台市泉区）

場の力 ⑪

フキデチョウ文庫（岩手県盛岡市）

まじわる災害公営住宅 ⑫

つばめの杜なかよし会（宮城県山元町）

住民が支え合う生活支援 ⑬

おとなりさんクラブ（宮城県岩沼市）

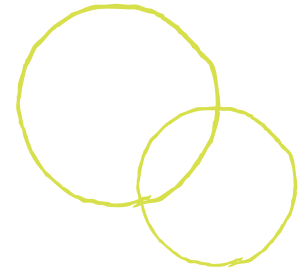
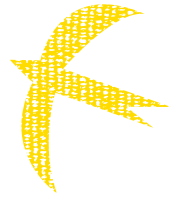
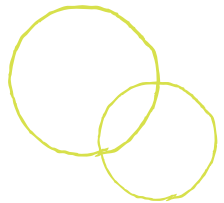
平成・向こう三軒両隣事情 ⑭

ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

暮らしを支える支援員 ⑯

亙理町社会福祉協議会（宮城県亙理町）



特集

シニアが輝く

町内会や自治会と同じように私たちの身近にある

シニア世代が生きいきと輝く場所

子育てや仕事が一段落したあとの新しい活躍の場として

たくさんの可能性を秘めています

みんなで楽しむグラウンドゴルフ、ラジオ体操やお茶飲み

「おたがいさま」の気持ちで助け合う仕組みづくり

自分たちの活動を発信するための広報誌やお便りの発行

お客さんとのやりとりも楽しみなフリーマーケットの開催など

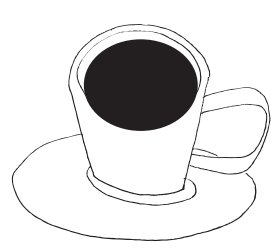
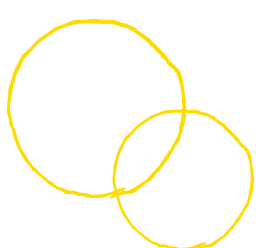
どの活動も、高齢になってもいま住んでいる地域で

変わらず元気に暮らしていく工夫にあふれています

今回は、自分たちの力で楽しみなながらできることを考えながら

日々の暮らしを充実したものにしようという活動する

3つの団体の取り組みを紹介します





グラウンドゴルフに白熱

縁あって出会った仲間とともに

◎東地区高齢者クラブ（宮城県南三陸町）

ポイント

- 毎朝開催されるグラウンドゴルフが、地区住民の健康とつながりをつくる
- 南方高齢者クラブで積み重ねた経験を軸に運営。住民同士協力し合い、活動を広げている



抜けるような青空の下で、輪になってラジオ体操

毎朝のにぎやかな光景

宮城県南三陸町内。町営志津川東復興住宅（A・B棟）前にある広場で、毎朝9時になると、住民たちがラジオ体操をしている光景が見られる。住民同士輪になって、「おらほのラジオ体操」の曲にあわせて、全身を動かして、元気に体操に取り組んでいる。体操を終えたあとは、同じ場所です度は、和気あいあいとグラウンドゴルフに熱中する。

体操は復興住宅の活動で、ゴルフは東地区高齢者クラブの活動だ（両方に参加する人も多い）。休日も含め、毎日欠かさず行っており、取材日も1月の寒空の下にもかかわらず、20人

近くの住民が集まった。参加しているのは、志津川東地区にある防災集団移転区画と町営志津川東復興住宅全体の住民だ。平均年齢70歳代の参加者は、「みんなと一緒に大きな声を出して笑って、楽しんでるよ」「若さの秘けつだね」と笑い合う。

「この高齢者クラブのモットーは『健康で、明るく、楽しく、元気よく』です」と副会長の佐藤清太郎さんが説明する。同高齢者クラブはあえて「老人クラブ」という呼称は使っていない。会長の古澤孝夫さんは、「個人的にですが、『老人』と言われると、どうも、杖を突いて、腰を曲げてというイメージがしますからね」とその理由を説明する。古澤さんは90歳の年齢で、元気に車の運転やパソコン、デジカメを楽しみ、南三陸町の老人クラブ連合会会長も務め、活発に活動している。

古澤さんは、以前は宮城県登米市にあるイオン南方店跡地応急仮設住宅の入居者がつくった「南方高齢者クラブ」の会長だった（本



東地区高齢者クラブ 会長 吉澤 孝夫さん

「先頭に立って、みんなと一緒に活動することを意識しています」

紙16号参照)。同仮設住宅から志津川東地区へ引っ越した住民が中心になって動き、南方高齢者クラブで積んだ経験も活かして、東地区高齢者クラブを設立した。もちろん、ほかの地区から移住してきた人も参加している。会長と副会長が全戸を回って出席を呼びかけた成果もあって、いまの会員は約70人と、町内最大の老人クラブとなっている。「ほかの老人クラブの手本になれるような活動をしていきたいです」と、吉澤さんは力強く語る。

グラウンドゴルフや「お茶飲み チョイ飲み会」（お酒もアリのお茶会）といった南方高齢者クラブで好評だった活動を、東地区高齢者クラブでも引き継いで行っている。復興住宅への入居当時、個人情報保護のため名札もなく、隣の声も聞こえず、隣近所に誰がいるか分からない状況があったという。そうした状況を改善するため、お互いが知り合う場をつくり、健康とつながりを育む目的で、東地区高齢者クラブは活動を始めた。

手を取り合って活動を

吉澤さんは、老人クラブなどの住民活動について次のように話す。「いまは、積極的な担い手がいなくて、場所が増えていると新聞やテレビでも出ています。お互いのため、健康のためにやるといふ気持ちになって、やっていただきたいですね。私たちはそういう気持ちで活動しています。「ここは一緒にやってくれる人がいるから」と、同クラブでは、13人の役員で話し合い、協力し合う。南三陸町社会福祉協議会とも連携して、運営している。

同クラブ副会長の山岸るい子さんは、震災前の志津川地区で新聞の集金員として回っており、住民のことをよく知っていたことから、同クラブで住民のつなぎ役となって働くとともに、会計も務めている。南三陸町社協の勝倉修さんは、町社協で町老人クラブ連合会の事務局を担当しており、助成金の申請や、行事の運営のサポートをする。

高齢者クラブのこれから

東地区高齢者クラブは2016年9月30日設立と、まだ始まったばかりだ。これからについて、吉澤さんは「いまは寒いから積極的な参加の呼びかけは控えています。温かくなってきたら、もつと呼びかけていきたいですね。身体がうまく動かせない人も、座って見ていただいているだけでも楽しいと思いますよ」と語る。さらに、「将来的には、ほかの老人クラブとも合同でグラウンドゴルフの大会をやりたいですね。それから、外から人を招いて交流会もやりたいです。南三陸町がいいところだよ、という宣伝も兼ねられたいですね。活動をと

おして健康寿命を延ばして、さすが南三陸町の高齢者だねと言われるようになってほしいです」と夢は膨らむ。かつて南方仮設住宅に居住時、吉澤さんは、「縁あつて出会った仲間。みんなで元気に暮らしたい」と語っていた。仮設住宅から続く「縁」、新しい場所で生まれた「縁」は、高齢者クラブのような活動をきっかけにして、交わり、広がっていく。



お茶飲み チョイ飲み会の様子

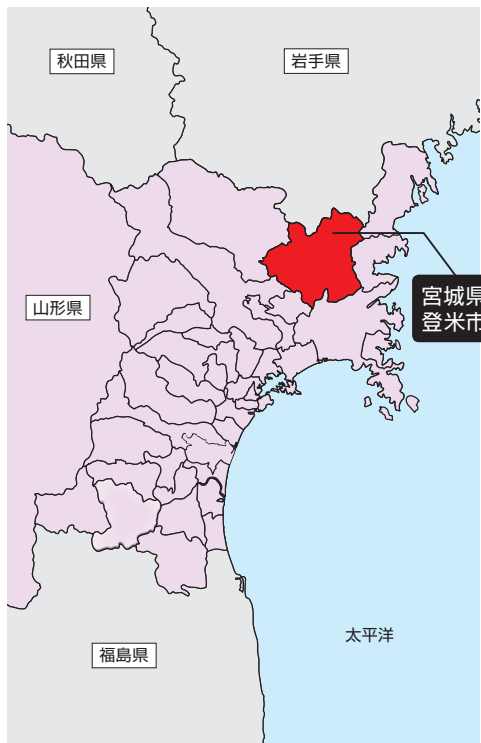
DATA

志津川東地区防災集団移転区画

東地区の防災集団移転区画は計140区画ある。地区の東部（行政上の区分ではない）にある15区画のうち、17年1月時点で13区画が建設・入居済みだ。地区の西部にある125区画のうち、17年1月時点で112区画が入居開始ないし入居の予定が決まっている。

町営志津川東復興住宅

全戸で265戸。うち、戸建てが18戸、共同住宅（A～J棟の全10棟）が247戸。地区の東部にあるA、Bの2棟は、16年7月から入居開始。17年1月時点で、全82戸中72戸が入居済みだ。地区の西部にあるC～Jの8棟は、17年1月時点で、全165戸中63戸が入居済みだ。E、F棟が16年9月より、残り6棟が17年1月より入居開始。



地区スポーツ大会後の残念会

みんなで社会参加!ちょっとした助け合いも

◎新道長寿会(宮城県登米市)

ポイント

- 会員宅を毎月訪問して、手づくりの広報紙を配付しながら、安否を確認!
- 会員相互で、雪かきや、ちょっとしたお手伝いをする関係づくり
- 会員が社会参加する場の創出に力を注ぐ

「月1回の役員会では、身体の調子を語り合い、どこの病院がいいかを情報交換して、お墓の話をしてから、やっと議題に入るの」「若い岡崎さんが会長になって地域が元気になった」と笑い合うのは、登米市石越町新道地区で活動する「新道長寿会」の皆さんだ。

新道地区には91世帯、253人が暮らし、高齢化率は36%だ。このうち、新道長寿会の会員は32人で、平均年齢は79歳。80歳代以上が多く、70歳代の会員が少ないことが悩みの一つだが、2年前に岡崎敏明さん(66歳)が会長に就いてから活動がぐっと広がった。

これまで実施してきたお花見会や芋煮会、地区のスポーツ大会への参加などに加えて、広報紙の発行や、戸別訪問しながらの広報紙配付と安否確認、各種講話、「雪かき隊」や「手伝いっこ」の発足など、着実に活動を積み重ねている。

活動場所は、新道集会所。隣には、グラウンドゴルフ場が広がる。昔と違って、同じ地域に住んでいても顔を合わせる機会がない

いま、「新道長寿会」の存在意義は大きいと役員は考えている。団体をなくしてはいけない。だからこそ、合言葉は「自分たちでやろう!」だ。

合言葉は

「自分たちでやろう!」

メンバー8人による毎月の役員会は、いつも話が脱線。よもやま話から、「じゃあ、来月ここに集まって『お楽しみ会』を開こう!」とサロンの開催が急に決まることもある。肩の力を抜いた、無理のない企画ばかり。企画が決まれば、次は広報だ。

80歳以上の会員が増え、「口伝えでは忘れやすいので広報紙を出してほしい」



芋煮会



新道長寿会の皆さん。前列左から2人目が会長の岡崎さん

新道長寿会 会長 岡崎 敏明さん

「自分たちが活動する会にしよう！」



月刊の広報紙「ひなたぼっこ日和」第44・45号 (A 4判・1枚表裏)

という周囲の要望に応えて、毎月発行するようになった手づくりの広報紙には、イベントの報告や予告がびっしり。写真やイラストが散りばめられたカラーの広報紙を楽しみに待っている会員が多く、発行が遅れると催促されることも。当初は『さんぞ語り日和』という題名だったが、「それは嫁・姑の悪口を指す方言だよ」と会員から教えられ、第5号から現在の『ひなたぼっこ日和』に改題。そういう会員とのやりとりを、岡崎さんは心底楽しんでる様子だ。

なにより、でき上がった広報紙を自ら持参して会員宅を巡り、おしゃべりしながら安否確認をするのが岡崎流。たとえイベントに参加できない会員がいても、毎月訪問するので会員の近

況はしっかり把握している。どの世帯が、どんなことで困っているのかも。そこから生まれたのが、「雪かき隊」や「手伝いっこ」だ。

「雪かき隊」と「手伝いっこ」

「雪かき隊」は、高齢で動けない隣家のために役員の夫が雪かきを買って出たという話から、「長寿会でも取り組もう」と昨年度から無償で始まった。高齢者のみの会員世帯を対象にしており、昨年度の実績は7件。積雪のあった日は、岡崎さんが地域を巡回して雪かきにあたる。

さらに、会員からの相談に応じて、イベント時や病院への車の送迎、年賀状の印刷などを手伝うほか、今年1月に会員同士が助け合う「手伝いっこ」を立ちあ



会員に広報紙を手渡して配付



談笑のひとつき

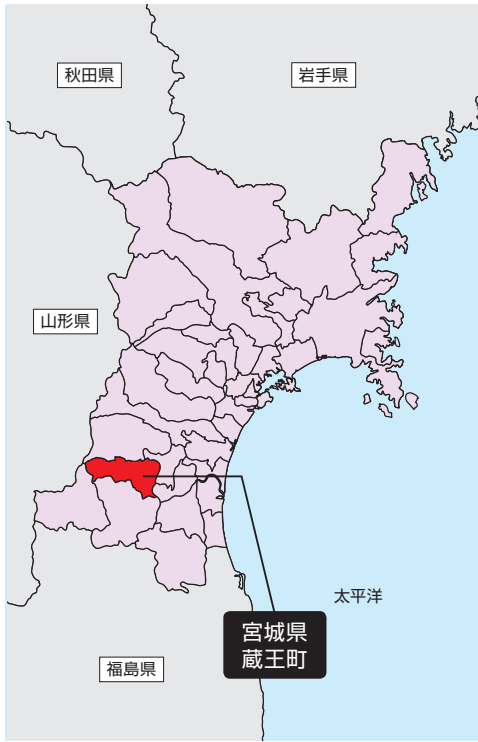
げた。「都合のつくときと、できることに限られますが、気軽に声をかけてください」というフレーズとともに、広報紙上でお手伝いがほしい人と、できる人を募集中。当面は岡崎さんが対応するというが、それは現会員のなかで実際に利用するのは5世帯もない、と把握しているからこそその判断でもある。基本的には、金銭等のお礼は受け取らず、また手伝いを頼むことをお返しとしている。

社会参加する場

新道長寿会では、会員が社会参加する場の創出に力を注ぐ。80歳になる女性会員は、イベントの受付係となり、出欠をとって配付物

を渡し、徴収した会費を計算して役目を終える。集まった人たちの前であいさつは、以前は会長と決まっていたが、いまでは「俺が」「私が」と立候補してくれる。「長寿会の日は、通院のやりくりをして必ず参加する」と語る会員も現れた。ボランティアの意識を高めようと、プルタブ収集に取り組んだ際、会員から「まだあるから取りにきて」と電話で言われて受け取りに行ったら、今日飲んだ分の3個だったことも。お世話になる会から、自分たちで活動する会にしよう！と目標を立ててから、ゆっくりと会員の意識は変化し始めている。

新道地区は、登米市の生活支援体制整備事業のモデル活動指定地区でもある。長寿会を含む、地区内のさまざまな関係者が集まり、「いきいきクラブ」という連絡会をつくったばかり。「雪かき隊」「手伝いっこ」をはじめとする長寿会の取り組みが、新道地区の住民相互の支え合い活動の基盤になっていくのは間違いない。小



活発な役員会

希望を持って、元気で長生き！ 地区に根ざした長寿会の活動

◎七日原長寿会（宮城県蔵王町）

ライター：熊谷智美

ポイント

- フリーマーケットの収益が活動費に
- 地区内の状況を把握し、住民同士の助け合い活動を検討中

古くは白石城主の片倉小十郎の馬の放牧場として拓かれたという歴史を持つ七日原地区^{なのかはら}。1946年の農地解放により、海外からの引揚者などが入植。開拓して暮らしてきた人たちが、定年退職後に移住してきた人たちなど、住んでいる人の在住歴はさまざまだ。

七日原長寿会の発足は2001年8月。蔵王町の各地区では老人会が組織されていたが、当時の七日原地区では消滅していたという。有志の声がけによって、「いま住んでいる七日原地区で、高齢になっても、高齢にともなう障害をもっても、自分らしい生活を安心して送れるように、支え合い、希望をもって楽しく過ごすこと」を目指して長寿会が組織された。現在の会員数は72人。

全戸配付の情報紙

会の活動は不定期に発行される「七日原長寿会だより」に詳しい。会員だけでなく地区全戸に配

付されるため、世帯に会員がいなくても活動内容や会員の様子を知ることができる。また、集会所で開催するミニコンサートなどは、地区の誰もが楽しむことができ、こうした催し物の案内も全戸に行っている。日帰り旅行では、被災地へ行って交流も行った。

会員減少に悩む老人会があるなか、七日原長寿会では自ら入会を希望する人も少なくない。会員数が微増傾向にあるのは、こうした情報発信によるところも大きいようだ。

盛況のフリーマーケットは恒例行事に

七日原長寿会の特色ある活動の一つに毎年11月に開催される「大根まつり」でのフリーマーケットがある。衣類、瀬戸物、手芸品、苗木などのバラエティに富んだ多くのアイテムが100円や200円という安価で販売されることもあり、観光客にも人気だ。参加し

た会員は、「お客様との会話やふれあいを楽しみ」と話す。ちなみに、前回は2日間で5万円近くの売り上げがあった。収益は会の活動費に充てられ、残った商品は次年度に繰り越すほか、福祉施設や海外の助け合い活動に寄付することもある。

元気で長生きできる

地区を目指して

高橋潔会長が「ここを元気な長寿の地区にした」と語り、会では体を動かすことにも積極的に取り組んでいる。ゲートボールや太極拳のクラブ活動があるほか、蔵王町老人スポーツ大会には事前に練習を重ねてから参加する。練習会の出席率は高く、本番での成績も上々だ。

昨年は、100歳を迎えた会員のために、「100歳を祝うつどい」が開催され、60人ほどが参加した。元気な主役の姿は、参加者にとっての目標であり刺激になったという。

互助の仕組みのための話し合いが重ねられている

新しい取り組みとしては、「ちょっと助け合い活動」が検討されている。会の役員は地区内の各班1人ずつで構成されているため、役員会では地区内のほとんどの様子が把握される。そのなかで、住民同士の助け合いの必要性が話題にのぼるようになった。いまは自立している高齢者も、歳を重ねることに不自由なことがでてくる。そこをサポートすることで、安心して暮らし続けることができるのではないかと発想だ。

活動について検討委員会が組織され、今後は実行委員会を組織して進めることになっている。今年1月下旬の役員会では、活動に関して会員にアンケートを行うことが検討された。

会の年間行事として、文的、体育的、科学的な3つの要素を取り入れ、高齢になっても心身ともにまだまだ成長していきたい。七日原長寿会発足の理念である。

名古屋学院大学 現代社会学部 准教授

村上 寿来 (むらかみ・としき) さん

2002年神戸大学大学院経済学研究科博士課程後期課程修了。博士(経済学)。神戸大学助手、(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構主任研究員、名古屋学院大学経済学部講師を経て現職。阪神・淡路大震災の復興と高齢化問題について調査に取り組んだ経験から、コミュニティにおける老人クラブの役割に関心をもって研究しています。



専門家に聞く地域づくりのヒント

「老人クラブ」の活性化は地域のためにも必要です

今回の3つの事例は、いずれもいわゆる老人クラブの活性化へ向けモデルとなるものです(ここでは一般名詞として「老人クラブ」を用います)。

南三陸町の東地区高齢者クラブは、仮設住宅で結成された老人クラブの経験をもとに、恒久住宅への移住後に改めて結成され、活発な活動が展開されているのが非常に興味深い点です。復興過程で何度も住居が変わる被災者にとって、その都度新たな関係をつくるのはたいへんです。「老人クラブ」は地域に根ざしているからこそ、地域でのつながりを生み出すための受け皿になることができます。東地区高齢者クラブは、毎日のグラウンドゴルフやお茶飲み、チョイ飲み会など、集まりやすい交流機会をより多く展開することで、被災地で必要とされる地域のつながりを生み出す役割を見事に果たしています。

登米市の新道長寿会は、若手の岡崎会長になって、戸別訪問による見守り、高齢者への生活支援活動「雪かき隊」「手伝いっこ」と、次々と先進的な活動を展開しているところが特徴的です。多くのクラブで会員の高齢化による活動停滞が課題になっており、若手会員の増強を図っていますが、若い(といっても60歳代ですが)行動力をうまく活性化につなげている好例です。「お世話になる会から自分たちで活動

する会に」というクラブ目標は、さらに他組織とのネットワークを通じて、他の世代を「お世話する会」にまで発展していく可能性もあります。

蔵王町の七日原長寿会は、一度消滅した地域にクラブが再建され、活性化に成功している事例です。ポイントは、会紙を地域に全戸配付し、非会員でも参加できるイベントを開催するなど、地域に開かれたクラブ運営がなされているところです。フリーマーケットも外部に開かれた交流活動ですが、他方また独自財源の確保につながっている点も重要だと思います。公費からの補助金が削減傾向にある「老人クラブ」にとって、活性化に取り組むためにも、またクラブ運営の独自性・独立性を高めるためにも、独自財源は大きな意味をもってきます。

「老人クラブ」は地域の高齢者の受け皿となり、その力を結集し、地域へと生かす点で、被災地の復興のために、そしてこれからさらに高齢化が進む日本全国の地域にとっても重要な役割を果たすことができます。それには今後もクラブが維持され、活発な活動が継続されていくことが重要です。今回の事例はクラブを牽引するリーダーの存在が重要な役割を果たしていますが、長期的にみると、リーダーが代わっても活発な状況が維持できるのか、が問題となるでしょう。地域のより多くの人々を巻き込みながら、持続的な活動を目指す必要があります。



37回目

市民リレー

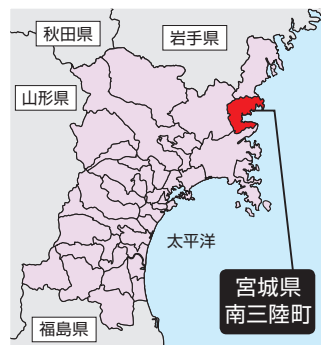
東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

何歳になっても、 笑顔で地域に

◎野いちごの会（宮城県南三陸町）



お手製の福笑いで笑顔がはじける

会の世話役メンバー（下段左が代表の大友あさみさん）

お茶飲みの傍ら、皆で折り紙に挑戦

宮城県南三陸町の中山間部、110戸ほどの集落の石泉行政区にある集会所には、毎月第4金曜日10時から14時くらいの間、70〜90歳代の高齢者約15人が集まる。石泉行政区と、隣接する吉野沢団地に住む人たちの集いで、60歳の7人が世話役となり、お茶飲み、食事に、ちよつとしたゲームを交えながら楽しく過ごす。会の名は、「野いちごの会」だ。

同会に特別なルールはなく、皆がしたいと思うことを一緒にする。折り紙やぬり絵、歌、踊り、体操に昼寝など、そのときの気分にあわせて、憩いの時間を分かち合う。会費は毎回300円〜500円で、世話役メンバーが調理や折り紙などの用意をし、ほかの会員の送迎を行う。高齢の会員も、漬けものを持ち寄りたり、テーブルなどを運んだり、自分たちの集い場のために協力する。

1970年代後半に整備された吉野沢団地には、現在60戸近くの民家が立ち並び、昔からの伝統行事がなく、女性同士が

集まったりする機会もなかった。そこで、団地の女性で会食する機会を設けたことが野いちごの会の始まりだった。その後、東日本大震災が起き、代表の大友あさみさんは同町の被災者生活支援員として活動するが、在宅被災者へのサポートにはあまり力を入れられないことなどを気にかけていた。「自宅に暮らしている高齢者も集まれる場を、自分たちの身近なところで」と考えた大友さんは、活動を停止していた同会のメンバーや石泉行政区の住民に相談し、2012年4月からいまの活動に取り組んでいる。

「みんなで集まって雑談するのが一番楽しい」「元気な先輩がいるから、自分も年をとったなんて言えないわ」と、同会を元気の源の一つと実感している会員たち。大友さんら、世話役のメンバーも、「先輩から教わることも多くて、私たちが元気をもらっている」とやりがいがある。会員同士が互いに敬い、支え合う同会は、地域のかけがえのない財産だ。

宮城県仙台市泉区に
向陽台団地ができて約40年。
かつて活躍したシニア世代が
一服できる場所を。
そんな想いでスタートした
いっぷく処。

活動内容はあえて自由に。
訪れた人が笑顔で交流をもち
健康増進につながる場所だ。
そうした場から
みんなが支え合う関係も
芽生えていく。

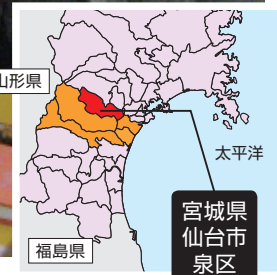
みんなで食べると
楽しいね！
おいしいね！



畑でとれた野菜で芋煮会



みんなでひとつところに集まって一服。



DATA

いっぷく処

開催日 毎月第1、3土曜日
9:00~12:00

開催場所 通い処 湧々庵 向陽台
〒981-3102
宮城県仙台市泉区向陽台2丁目
5-23



畑でとれた芋を焼いて地域の子どもにも



花壇のセレモニー。地域の子どもたちが苗植え



いっぷく処代表の越後征男さん

宮城県仙台市泉区向陽台は、高齢化率が約31%とやや高くなっている。そこで、高齢者が子どもや孫と外出するきっかけにしたいと、2014年1月に「いっぷく処」が開設された。代表を務めるのは、企画の発案者で、向陽台4丁目町内会会長の越後征男さんだ。向陽台町内会や民生・児童委員、福祉委員、向陽台地域包括支援センター、向陽台地区社会福祉協議会などが協力して運営する。

いっぷく処は、毎回30人前後が参加しており、家庭的な雰囲気なかでみんなが集まれる場所となっている。テーブルごとに集まって、お茶を飲みながら話したり、将棋を打ったり、歌を歌ったり、折り紙を折ったりと、自由に過ごす。「今日は○○をしましょう」というのが無いのがいい」と、参加者は話す。

当初、男性が少なかったため、男性が参加しやすい場として、畑と花壇もつくった。いまは男性も増え、水やりなどの世話を率先して行う。今後、越後さんたちは、ゴミ出し、電球交換などの生活支援を行う有償サービス「ささえ愛の会」も始める。自分たちのまちで一緒に住んでいく、そのために動き続ける。

楽しみに宿題をする中学生の後ろを
 デイサービスを利用する高齢者が
 のんびりと通りすぎ
 隣の部屋で場所を借りて
 活動している市民団体に
 「何をしているの？」と声をかける
 当たり前のように
 そうではない日常が
 自然な形でそこにある
 みんなが気軽に集う
 公園のような場所は
 今日も穏やかに

地域の住民が訪れるのを待っている

地域で暮らす
 みんなの居場所



通所介護のメインスペースは2階。一般の利用者も自由に出入りができる

DATA

フキデチョウ文庫

盛岡市中ノ橋通り一丁目8番6号
 一般社団法人シアワセ計画舎が
 2014年7月に開所した通所介護施設
 と民間図書館の複合施設。介護施設
 ではデイサービスのほか、障がい
 者向けの日中一時支援も行う。収益
 事業として通所介護などで得た利益
 を、公益事業である図書館の運営維
 持費に充てている。



1階奥の部屋を借り活動する市民団体。同文庫は無料で場所の貸し出しも行う



同文庫をよく利用するという近所に住む女子中学生。リラックスした様子で宿題に取り組む



施設1階は図書館のメインスペース。棚の合間に椅子が配置され、落ち着いた本を読むことができる

岩手県盛岡市にある「フキデ
 チョウ文庫」は通所介護施設と民
 間図書館の二つの顔を持つ。どち
 らも同じ建物で行っており、場所
 の行き来に制限はない。代表理事
 の沼田雅充さんは、「本をツール
 に、さまざまな人が利用できる地
 域に密着した施設をつくりたい」
 という思いから2014年7月に
 同文庫を開設。口コミで少しずつ
 利用者が増え、いまでは地域の子
 どもから大人まで、さまざまな人
 が訪れる。

また、同文庫のデイサービスに
 は決まったプログラムがない。利
 用者はお茶を飲みながらのお喋り
 を楽しんだり本を読んだり、時
 に食事づくりや片付けの手伝いを
 したりと、自宅での生活と同じよ
 うに思い思いに過ごしている。
 「普通の生活を普通にできるお手
 伝いをしたい」という思いから過
 剰な介護はせず、できないことを
 補うような支援が主だ。

「公園のように誰でも気軽に
 使って欲しい」と沼田さんは言
 う。多様な世代、立場の人が集い、
 つながる場所として同文庫は地域
 に欠かせない場所になっていくだ
 ろう。 **吉**



健康づくりは、 友だちづくり

つばめの杜なかよし会
(宮城県山元町)

まじわる!
**集団移転&
災害公営住宅**
第22回



毎月第2・4木曜日の10時前になると、山元町つばめの杜東集会所はにぎやかになる。「今日はおしゃれな格好してるね」「お餅を食べて太ったから痩せない」と和気あいあい。「家で横になっていたら『いま



音楽にあわせてストレッチ体操

から来い』って電話がきたから来たよ」と話して皆を笑わせているのは、つばめの杜東自治

会会長の庄司孝典さんだ。10時になると、世話人の田所まり子さんと伊藤よしみさんによる出欠確認と健康チェックのあと、水本恵子さんがリーダーとなり、DVD教材を見ながらストレッチ体操やダンベル体操で1時間ほど

体を動かす。その後は、皆でさつとテーブルを出し、漬け物やお菓子を並べてお茶タイム。「体を動かすのは気持ちいいね」「おしゃべりが楽しい」。健康増進を目的に始まった「つばめの杜なかよし会」には、毎回20人前後が参加。月300円の会費は茶菓代となり、世話人が漬け物を差し入れることも多い。当初30分程度だったお茶会は、いまでは1時間に延び、さらに帰り際も立ち話が続き、名残惜しさが漂う。

つばめの杜は、新山下駅周辺に広がる山元町最大の集団移転地で、災害公営住宅を含む約500世帯が暮らす。東西2つの自治会があり、新しい住民同士の交流が課題となるなか、東自治会では「文化交流部会」を設置。夏休みにラジオ体操を企画したり、町地域包括支援センターと東北福祉大学の協力のもと月2回の健康教室を計6回開くなど、住民が顔を合わせる機会をつくってきた。そこから「自分たちで体操を続けよう!」と昨年12月に発足したのが、「つばめの杜な



帰り際、名残惜しく立ち話

かよし会」だ。「周囲は知らない人ばかり。なかよし会に来て友だちになれた」「震災前まではダンベル体操をしていたけれど、みなし仮設に入ってから中断し、久々に体を動かした」と話す参加者も。会を休む人がいると、互いに気にかけて合う関係も生まれてきた。

東集会所では、カラオケ教室(月2回)や料理教室(月1回)も開かれている。田所さんと伊藤さんと水本さんは東自治会の役員でもあり、「皆が楽しいのが一番」「参加者のうれしそうな顔を見ると、辞められない」と笑う。「無理せず、今後も活動を続けていきたい」。

小



ボランティアメンバーの國井照司さん。
依頼者宅の玄関前にてゴミを受け取る

住民が支え合う生活支援 ①

おとなりさんクラブ（宮城県岩沼市）

地域の小さな困りごとを手助けする 男性中心の有償ボランティア

宮城県岩沼市の岩沼南小学校区では2015年4月から、日常のなかのちよつとした困りごとの手助けを行う有償ボランティア組織「おとなりさんクラブ」が活動している。ボランティアとして登録しているメンバーは30人程度。登録時に自分ができるような活動やしてみたい活動を申請し、事務局機能を担う同市南東北地域包括支援センターが住民のニーズにあわせてボランティアのマッチングをする。

メンバーの1人である國井照司さん（78歳）は、月に1回程度、近所に住む高齢の夫婦のゴミ出しの支援を行っている。同クラブでは30分200円を目安にしているが、國

井さんたちはお互いに話し合い1回1000円で請け負うことにした。定期的に娘さんが訪問し、身の周りの世話のついでにゴミ出しを行っているが、行き届かない部分を國井さんが補う。ゴミ出しを依頼したいときには、前日に電話で連絡が入る。國井さんは、自宅のゴミ出しに行くのにあわせて依頼者夫妻宅を訪問し、ゴミを預かって集積所に向かう。「自分のことについてにやっていると大したことではない」と國井さんは笑うが、日常のなかの小さな困りごとを気軽に頼むことができているのは、住民同士の支え合い活動ならではだ。

春から秋にかけて同地区内にあるグループホームの庭の草取りなども行う。入居者が一緒に活動をすることもあり、秋にはグループホームがお礼も兼ねた芋煮会を企画するなど、ボランティアの活動にとどまらない交流の広がりがあるという。

同クラブの特徴として、メンバーには男性が多い。これは同クラブのさきがけとして同地域包括支援センターが企画した、地域包括ケアについて学び、地域に出て活躍してもらうための講座、「おとこ塾」の卒業生が多いためだ。同講座は13年度、14年度の2期開講し、それぞれ定員の15人に迫る参加があった。こうした地域活動の担い手を育成する

● DATA

おとなりさんクラブ

2015年4月に岩沼市モデル事業として立ちあげ。主にゴミ出しなどの日常生活支援を行う。登録メンバーは30人ほど。同市南東北地域包括支援センターが事務局を担当している。17年4月からは自主グループとして活動予定。



おとなりさんクラブの案内。直接の依頼のほか、ケアマネジャーからの紹介も多い



車で5分ほどのゴミ集積所。自宅のゴミと一緒にゴミ出しを行う



グループホームで行った草取りの様子

● Profile

ご近所福祉クリエーター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエーション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエーターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆,CLC発行)。



老犬介護事情

ご近所福祉クリエーション主宰 酒井保

老犬は、「要介護1」?

昨年暮れのこと。仙台のビジネスホテルで、一人晩酌をしているところへカミさん(僕の伴侶)からメールが届いた。「件名」の欄には、「老犬。」とあり、「本文」の欄には、「飼っちゃだめ?」とだけ記されていた。メールには、写真が一枚添付されており、その写真を見た瞬間僕は、カミさんの言わんとしていることすべてを察することができた。写真に写っていたのは、洗っていないモップをまとったようなボロボロの犬の姿だった。

メールを確認した5分後、カミさんから電話がかかってきた。

「役所の保健課に知り合いがいてね。このワンちゃんの飼手が見つからなくて困ってるらしいのよ。3日後には殺処分されてしまうらしくて。かわいそうじゃない。飼っちゃだめ?」と懇願するカミさんに「その犬、写真だとすいぶん衰弱しているように見えるけど、結構なお年寄り犬じゃないの?」と確認してみた。

「うん。今のところ要介護1くらいだと思っ」

「よ、要介護1!?ということ、は、ゆくゆくは要介護2、3と介護状態が悪化していくということ? ん〜ダメです!」と言いつつ放った僕に「やっぱりかあ〜」とカミさん。

人間の介護知識はあっても、

犬の介護についての知識はまったく持ち合わせていない。可哀そうだが、ここは「よし!」というわけにはいかない。電話を切ったあとも、その要介護犬の姿が頭から離れず、晩酌の量はいつもより多くなっていた。

犬の介護施設では「看取りプラン」も!

果たして犬にも「要介護」というような状態評価があるのか? そんなことが気になった僕は、インターネットで検索してみることにした。「要介護犬」とキーワードを入力してクリック……すると、

たまげた! 驚いた!

- ・愛犬が要介護になったら
- ・老犬介護のノウハウ
- ・高齢犬介護の基本

などなど、要介護犬に関する情報が何万件と出てきた。驚いたのは、犬の介護施設が存在するという事実。「酒井さん、そんなことは今日日、当たり前ですよ!」と言いたくなる方もおられるだろうが、無知な僕は、素直にたまげた! 驚いた! のである。

なんと犬の介護施設を探す検索サイトもあり、ある施設のホームページを覗くと、「ショートステイ」「ロングステイ」などのサービスがずらりと紹介されていた。驚いたのは、「終生」という看取りプランまでもが存在するという

こと。「ペットではなく家族である」という解釈が当たり前の時代。こんなことに驚いている僕は、なんとも時代遅れ……反省。

老人と犬

では犬のほうは、人間をどう見ているのだろうか? 家族として見ているのだろうか?

2017年1月3日、新年を広島で迎えた初詣の帰り道。安芸の宮島を左に眺めながら信号待ちをしていると、犬を散歩させている高齢男性の姿が目にとまった。その男性は、両手にリードを持っており、右手のリードの先には柴犬。柴犬といっても、まだ

子どもの落ち着きのない小柴である。左手のリードの先には、黒のラブラドル。こちらはというと、頬も弛み、目も虚ろでとても貫禄があるとは言えない老犬。

一瞬の出来事だった。何に興味を示したのか、小柴が急に走り出し、歩道から車道に侵入してきた。小柴をつないだリードは、ピンと張り、その勢いで男性はよろけながら地面に膝をついた。

車窓から「大丈夫ですか?」と声をかけた僕に、男性は、笑いながら無言で左手をあげて、「大丈夫だ」という意を示した。が、次の瞬間、男性は「はっ」とした様子で何かを探し始めた。小柴を制止することに「生懸命で、気

がつけば、左手に持っていたリードは手から離れていた。

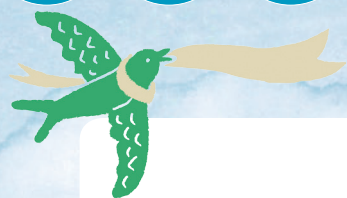
「リードは? どこだ?」という仕事で辺りをキョキョロしている男性のところへ、自分の首につながついているリードの端をくわえたラブラドルがノソノソと近づいていった。そして、くわえていたリードを男性に渡したのである。男性は、ラブラドルの頭を優しくなでながら、何かを話しかけていた。話しかけるその口の動きは「ありがとう」と言っているように僕には読めた……感動した。

その情景に僕は確信した。「犬のほうも人間を家族だと思っているな。きつと」

追記……くだんの推定「要介護1」の老犬は、飼い主が見つかり幸せに暮らしているとのこと。ホッ……。



宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

保証人は必要か？

ある日の相談内容です。ショートステイを利用している高齢者の、契約時身元保証人を長男が担っていました。その長男が病に倒れたということで、施設側から「保証人としての役割を担えないので、別な保証人を探すように。保証人がいないと施設利用はできません」という話をされた由（腹の立つ話です）。

これまでも同様な内容を相談される機会が多々あり、その都度血圧が上がるほど「怒り」を感じてきました。こんなことしか言えない施設は、レベルが低い。施設側に「どうして保証人が必要なのですか？」と問うと、利用料の支払い未納の防止、医療行為が必要な場合の同意者、もしもの場合の対応等に保証人が必要という勝手な言い訳。そこから「ゴジラの逆襲」です。保証人が必要なのは、本人にとってではなく、施設側のご都合です。必要なサービスが途切れることは死活問題。保証人の必要な理由を無視する気はありませんが、いなくとも継続利用できるための次善の策を講じる姿勢は、対人援助者には必須です。

災害公営住宅の入居時、連帯保証人を要件とする同様の「弱い者いじめ」が見られました。復興庁は、保証人を入居の要件としない対応を求めています。当たり前です。頼れる存在がいない人への入居不可は排除の論理です。

後見人より身元保証人が施設としては都合がよい、と言った某施設長を怒鳴りつけたことを思い出しました（この時から、私は瞬間湯沸かし器となった?）。本人の権利擁護からの後見人、施設の都合からの保証人。だからいま、意思決定支援制度のことに関心をもっています。本人の自己決定を基本とする福祉制度利用では、本人の意思を形成し、表明できる配慮を行い、表明された意思（自己決定）の実現を支援するという視点が必須だからです。ならば、身元保証人という存在は必須要件でしょうか？形式的な存在でしかないと言うと、言い過ぎでしょうか？

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



地域に“福祉を語り合う場” がありますか？

被災地では、仮設住宅から恒久住宅等への転居が進み、「被災者支援から地域福祉へ」という流れになってきています。被災地に限らず、介護保険制度の改正で“地域づくり”が全国共通の課題になってきています。また、高齢者の問題だけではなく、障がい者、子どもの問題、ひきこもり、生きづらさを抱えた方の問題など地域で考え、取り組むべき課題は多くあります。

言うまでもなく、地域支援、地域福祉は、個別支援とは違い、多くの住民や関係団体へのかかわりが前提として求められます。地域支援、地域福祉は制度で「こうやってください」と地域へ持って行ってもすんなりと動くものではありません。地域のさまざまな活動は、住民や関係団体の意識、意思に基づいて任意で動いているからです。福祉課題を地域で取りあげ、具体的な活動にまで至るにはいくつかのプロセスが必要です。

たとえば、「孤立しがちな人をなくしたい」という課題があったとしたら、その課題を地域の住民が自分のこととして認識し、ほかの多くの住民とも課題や思いを共有していくところから動きが始まります。そのためには、そうした課題を地域で話し合い、思いを遠慮なく出し合える場、機会が必要です。

皆さんがお住まいの地域では、また、担当している地域ではどんな状況でしょうか？地域で福祉について話し合える場、協議の場、機会などがありますか？

自治会やコミュニティ協議会のなかに“福祉部会”がある、小学校区単位に地区福祉委員会（地区社協）がある、というところもあります。しかし、地域によっては地域住民レベルで福祉のことを話し合える場、機会がないところも多くあります。『地域支援・地域福祉』を進めていくためには、まずここから考えていく必要があると思います。

平成28年度 宮城県地域福祉コーディネート研修

これからの管理職に求められる
円滑な組織運営の実践と展開
～スーパーバイザー研修～

【仙台会場①】3月6日（月）宮城県自治会館
【仙台会場②】3月14日（火）宮城県自治会館
講師：大坂 純（仙台白百合女子大学 人間学部 教授）
佐藤 幸子（仙台市台原地域包括支援センター 所長）



「さんさんファーム」で収穫したそばを使ったそば打ちの会

暮らしを支える支援員23

住民の声をたいせつにした きっかけの場づくり

社会福祉法人亶理町社会福祉協議会
(宮城県亶理町)



ささえあいセンター「ほっと」を中心に被災者支援を行ってきた亶理町社会福祉協議会。震災から5年が経過し、同町内では仮設住宅から災害公営住宅などへの転居が進んでいる。同町社会福祉協議会では、訪問などの見守り支援を続けながらも、再び新しい環境に移った住民同士が、周辺地域も含めて交流するきっかけとなる場づくりに力を入れる。

同町内の各災害公営住宅で行われているのがラジオ体操だ。当初は少人数の参加しかなかったが、毎日活動を続けていくうち、災害公営住宅の住民だけでなく周辺地域の住民の継続した参加が見られるなど、交流の場として一定の成果をあげている(本誌47号に関連記事)。また、新しい取り組みとして16年3月から同町内に畑を借り、「さんさんファーム」という農作業を通じての交流活動を行っている。災害公営住宅のある4地区の住民を対象としており、毎週金曜日の活動日には毎回10人前後が参加する。活動が定着していくにつれて、参加者以外の住民からも「できた作物を分けて欲しい」と声をかけられたり、農業の経験がありながら、足が悪いなどの理由で作業には参加できない住民がアドバイス役になったりするなど、参加者以外との交流のきっかけにもなっているという。

場づくりの活動を継続するため、住民を中心とした活動へ移っていくが必要になるが、住民に活動のバトンを渡すタイミングが重要だとボランティアコーディネーターの佐藤寛子さんは話す。

「タイミングが早すぎても遅すぎてもよくない。何度も失敗しながら、支援員さんも少しずつその感覚がつかめてきたようだ」とこの5年間を振り返る。

タイミングをはかるための指標として役立っているのが、こまめに行ってきた記録だ。特にラジオ体操は毎日の参加者の氏名、参加者の声、支援員が気づいた点、改善点を記録しており、活動の振り返りを行う際に、住民はもちろんのこと支援員自身の意識の変化にも気がつくことができる。また、新たな取り組みを考える際には、記録した住民の声のなかから希望があったものをもとに検討することもある。「さんさんファーム」もそうして企画された取り組みの1つだ。住民がやりたいと思うことを形にすることで、意欲的に活動に取り組みむことができ、自主活動への移行もよりスムーズに行うことができる。

同町内での今後の被災者支援について佐藤さんは、「皆さんの生活を、いかに震災前の生活に近づけていけるかがたいせつ」と話す。被災者支援から地域支援への移行を目指した活動をとおして、震災による転居で一度途切れてしまったつながりをつなぎ直す同町社会福祉協議会。住民の小さな声にも耳を傾けながら、また新たな一歩へ歩みを進める。吉

DATA 社会福祉法人亶理町社会福祉協議会
宮城県亶理町字旧館60-7
TEL 022-334-7551 FAX 022-334-7552

お知らせ

☆次号予告 特集「高校生」

平成28年度 生活支援コーディネーター応用研修

<応用研修2 地域福祉コーディネート中堅研修>

【仙台会場②】2月23日(木)~24日(金) 宮城県自治会館
講師:藤井 博志(神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授)
浜上 章(宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー)
浅野 恵美(美里町社会福祉協議会 地域福祉課長)
眞籠 孝史(東松島市社会福祉協議会 地域福祉推進係 コミュニティソーシャルワーカー)

<応用研修3 生活支援コーディネーターによる実践報告&事例検討会>

【仙台会場②】3月16日(木) 宮城県自治会館
講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)
大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

平成28年度 生活支援コーディネーター養成研修

<生活支援コーディネート基礎・実践研修>

【仙台会場③】3月23日(木)~24日(金) 宮城県自治会館
講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)
大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

52号を読んで、メンバーの人たちの楽しそうな写真が印象的でした。メンバーの視点や専門家の視点などいろんな角度から紹介されていて、読んでいて面白かったです。特集のポイントがあるのもわかりやすく、地図やDATAも載っているの、県外出身の私でも「あの辺にあるのかぁ」と実感が湧きやすかったです。ただ、重要な部分は赤字にしたほうが、さらに読みやすくなるはずです。(山形県新庄市 M・Sさん)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joh@clc-japan.com

編集後記

南三陸町の志津川東地区にある、災害公営住宅A・B棟の前には、町役場の新庁舎が建設中です。地区内には、今年1月に入居が始まったばかりの災害公営住宅も。地区全体から「新しくでき上がっていくまちのエネルギー」のようなものを感じました。また時機を見て、地区周辺の活動を取材させていただきたいです。(田中)

バックナンバーがホームページで読めます!
http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/